

令和6年度 園 評 価

(園名) 大垣市立青基幼保園

【 園目標 】 『 生き生きと活動する子 』 ～心豊かで元気いっぱい遊べる子～ じょうぶな子・考える子・思いやりのある子	【前年度の成果と課題】 ・異年齢交流やクラス交流を行い、保育者間で刺激し合い保育を実践する。環境構成について職員間で話し合い質の向上に繋げる。 ・保育者自身が相手への思いやりのある言動のモデルとなるようにする。子ども達が自ら気付く姿を認め、さらに周りへと広げていく機会を確保する。 ・ドキュメンテーションを引き続き充実させ、視覚から伝えられる良さを大切にする。 ・積極的に園外保育に出かけ、地域や身近な自然に直接触れ合えるようにする。
--	---

観 点		短期目標(評価項目)	自己評価	保護者評価	評価及び意見の概要
子どもへの保育・教育	身体的発達	保育者や友達と一緒に十分に体を動かすことを楽しむ	3.25	3.89	○さくらさくらんぼリズムや隙間時間を使った体づくり、戸外遊びなどを毎日の生活の中に計画的に取り入れたことで、様々な体の動きが経験できた。 ○発達や年齢に適した内容を考えたり、随時、新しい動きを取り入れたりすることで、子どもたちがワクワクしながら楽しんで体づくりをすることができた。 ○継続した体づくりにより、体の使い方が分かり、普段の姿勢も良くなってきた。また、今まで消極的だった縄跳びや鉄棒など、色々な遊びに自ら挑戦するようになり、心と体の成長が感じられた。 ☆体全体を使った体力づくりや体幹を鍛える取り組みの工夫により園児が楽しむ姿がよい。 ☆日々さくらさくらんぼリズムを取り入れ、子どもにとって体を動かすことが当たり前になっていることが体の基礎作りになって素晴らしい。 ●発達段階を把握し、苦手な部分を育てていけるような援助や環境を考えていきたい。
	精神的発達	自分なりに試したり工夫したりして表現（遊ぶ）することを楽しむ	3.2	3.7	○随時保育を取り入れ、成長に合わせた玩具を少しずつ替えたり部屋の環境を整えたりしたことで、子ども達が好きな遊びを見つけ興味をもって遊ぶようになった。（未満児） ○継続的に遊んでいくことで、振り返りの中で友達の姿に刺激を受け「明日はこうしてみよう」とするようになった。 ○子ども達のやりたいことと保育者が経験させたいことをバランスよく取り入れ保育することで、様々な経験をし、やりたいことを見つけて遊び込めるようになった。 ☆好きな遊びを通して発想力やそれを表現する力につながっている。達成感や互いに遊ぶ楽しさを発見できてよい。 ●遊びを進める事はできるが、イメージを広げる力は弱く発展させることは難しい。イメージしやすい素材を見直したり、保育者も一緒にごっこ遊びをする中で遊びを豊かにしていく。
	社会的発達	自分の思いを伝えて相手の思いを知る	3.55	3.47	○クラス活動で友達同士意見が食い違った時、個別に話を聞く中で全体で話した方が良い時は時間を設け、意見を伝え合えるようにし互いに納得して進める事ができた。 ○自分の思いをうまく言葉で表現することが難しい子に対して、保育者間で援助方法を統一して、思いに共感しながら、その方法が身に付くよう根気よくかわった事で伝えられるようになった。 ○グループ活動を増やすことで、自分の思いを伝えやすく、仲間の思いや姿を受け入れ行動を共にしたり、相手のペースに合わせようとする姿がでてきた。 ☆個の考えを尊重して伸ばすような関わり（待つ・引き出す）が非常に良い。子ども同士の関係性を育むことも重要で今後発揮されていくと思う。 ●相手の思いに気付く事ができても、受け入れられない事もある。まずは共感し相手の思いに気づけるように働きかけ、折り合いの付け方を考えていけるようにしていく。
対する支援等	保護者・地域の連携	保護者と共に子どもの育ちを支える	3.55	3.72	○ドキュメンテーションや学年だよりなどを用いて、保育の様子やねらいを写真や言葉で分かりやすく伝えた。加えて、我慢や葛藤など、内面的な育ちについても保護者と会話していくことで、子どもの育ちや大切にすべきことを更に実感してもらうことが出来た。 ○子どもの良さや育ちを、クラスをこえて園内の保育者間で伝えあい、共有していった。子どもを色々な角度から見ることができ、担任だけでなく園全体として子どもや保護者を支えていくことにつながった。 ☆ドキュメンテーションをいつも楽しみにしている。 ●今後も、子どもの良さや育ちを伝えながら援助が必要な部分にも触れ、保護者と共に共通理解を図りながらサポートしていけるよう努めていく。
	保幼小連携	保幼小の接続に向けた指導の工夫	3.45	3.4	○小学校との交流が、園と身近な内容だったことや小学生の優しさに触れることで、子ども達は楽しくかわる事ができ、1年生への憧れや就学への期待につながった。 ○園内での異年齢交流（リズム遊びや野菜の収穫、クッキングなど）では、学年間で連携を取り合い、構えることなく交流する事ができた。「大きい子みたいにやってみたい」「もっと上手になりたい」「カッコいいところをみせたい」と張り切る姿が意欲につながったり、小さい子へのいたわる気持ちなど刺激を受け合ったりすることができた。 ○振り返り時に、相手にわかる伝え方を意識していくことができた。（持ち場型） ☆先を意識した希望（憧れ）をもつ取り組みである。 ●小学校との活動交流を深める中で生活内容を知り、自分の行動を振り返ったり、考えたりしながら就学を意識していけるようにする。
体制全般	危機管理	自分の体や命を守る為に危機管理能力が身に付くようにする	3.9	3.47	○ヒヤリハットやマニュアルを全職員で共有し、適宜それらを見て活用したことで、職員の危機管理意識が高まった。昨年と違った想定命を守る訓練を年6回行うことができ、災害想定を変化させながら、より具体的な内容の訓練を行うことが出来た。職員も子どもたちも状況に合わせ、どうするとういかに自ら考えようとするようになった。 ☆危機管理意識が高い取り組みでよい。小学校とも連携していけるとよい。 ☆ヒヤリハットも命を守る大切な取り組みであるので今後もしっかり行っていくとよい。 ●計画的なドキュメンテーションの掲載や、園だよりの予定欄に命を守る訓練の実施予定を具体的に掲載するなど、分かりやすく保護者に伝え、家庭でも関心をもって話し合うきっかけとなるようにしていく。

【次年度に向けて】

- ・子どもにどんな力をつけさせたいかを明確にし、そのために何をすると良いか、なぜそれが良いか、子どもの発達理解をしながら、職員間で話し合い保育を行っていく。
- ・思いの相違による葛藤の体験を大切にしながら、他者の気持ちを想像する力を育めるようにする。
- ・子どもの実態に合わせた意図的な保育や意味を情報発信していきながら家庭との連携につなげる。
- ・遊びに夢中になると安全面においてヒヤリすることがあるため見直していく。小学校と連携した危機管理体制を考えて実践していく。